



Title	対人コミュニケーションの現場におけるフットィングの役割についての一考察：背景の異なる日本語話者二者間の初対面会話のケース・スタディ
Author(s)	中原, 京子
Citation	大阪大学言語文化学. 2011, 20, p. 37-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対人コミュニケーションの現場におけるフットイングの 役割についての一考察

—背景の異なる日本語話者二者間の初対面会話のケース・スタディー*

中原 京子**

キーワード：対人コミュニケーション、フットイング、初対面会話

In this study I submit a case study of the first-contact conversation between two Japanese Speakers of different backgrounds considering the role of footings (Goffman 1974) in the conversation. Mimaki (2008) asserts that Brown and Levinson's linguistic politeness theory is aimed to lighten the risk of FTA estimating the extent of the face's damage. There has been no universal definition for the politeness strategies beyond the cultural, social differences especially in the viewpoint of the addressee (Ide 1987; 2009; 2010). Therefore, I chose the natural conversation between two Japanese speakers of different backgrounds at the first contact where the participants know the conventional politeness but are often uncertain of the degree of FTA caused on the discourse, to see what and how it is related to the politeness considering of the viewpoint of the addressee and to compare the turn takings, negative/positive words, first pronouns, and footings in narratives with the participants by the graphs and some of the conversational data. The participants are: P, a 63-year-old female volunteer for a local Japanese language class; O, a 25-year-old university graduate from Taiwan who is bilingual in Japanese and Chinese. The analysis shows the turn takings are not much different between O and P and the negative/positive words will not appear to the extent of breaking the communication. However, their footings are almost different during the conversation. P would not change her footings, the footing of 'a teacher' in her narratives while O kept her footing as 'an individual'; moreover, P repaired the plural first pronoun to the single to extract O and aggregate (Lerner and Kitzinger 2007) to the plural to refer herself and the others excluding O, after O confessed she is Taiwanese. This usage of first pronouns makes the addressee isolated in the situation. The follow-up interview supports this analysis: O complained about P who said only in the viewpoint of 'tatemae' and did not want such conversation any more, while P enjoyed the conversation and declared if she had been informed of O's nationality, she would treat her more tactfully. Thus it is implied that the footing changes considering the addressee's footings are important for face-to-face communication.

* Considering the Role of Footings in the Context of Face-to-Face Communication:
A Case Study of the First-Contact Conversation between Two Japanese Speakers of Different Backgrounds
(Kyoko NAKAHARA)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

Brown and Levinson (1987、以下 B&L) の MP (Model Person) による言語学的ポライトネスは、FTA¹を遂行するにあたって、その FTA のフェイス²への侵害度の見積りに応じて話者が様々なポライトネス・ストラテジーを用いてリスクを軽減するということが骨子となっている (三牧 2008)。つまり、MP による結果を定型的に予測した配慮表現形式であり、数回の発話連鎖によってポライトネスが遂行される談話においては、談話全体からみなければ捉えられない現象が存在する。B&L のポライトネス理論は、話し手の視点による話し手の言語行動に関する理論であり、対人コミュニケーションの現場からみると、ポライトネスが記述的にみられる箇所に話し手の配慮が認められても、結果的に聞き手がポライトネスを評価せずコミュニケーションが不成立に終わる可能性は否定できない。したがって、対人コミュニケーションの現場に即応したポライトネスの見積りを行うには、まず聞き手を意識した視点が必要となる。

本研究の目的は、背景の異なる (Ide 2009) 日本語話者二者間の初対面会話についてのケース・スタディを通して話し手が談話中に取りフットイング³の果たす役割を提示し、聞き手視点の FTA 侵害度の見積りについての研究に貢献することである。その方法の一つとして、社会慣習的なポライトネス⁴を共有できても背景情報をもとに談話上の言語学的ポライトネス⁵を見積もることが不確かになりがちな状況下での、自然会話の相互行為上でフットイングの果たす役割を探究するものである。

2 先行研究

今日的課題として、語用論における聞き手の視点に立ったポライトネスの問題 (井出 2009)、社会言語学におけるアイデンティティの問題など、他者理解を中心とした言語学研究が近年とみにあげられている。この問題は以前より、例えば Leech (1983) が「語用論には話し手側と聞き手側の両方の視点から問題を解決する余地がある」と、聞き手の視点についても短く言及している。B&L が彼らのポライトネス理論は世界的に汎用できるものであるとしていることに対し、井出 (1987) は、B&L のポライトネス理論の前提が欧米中心の MP であり、欧米以外の他者を考慮していないと主張する。またポライトネスの観点ではないが、談話分析では既に、Gumperz (1982) が異文化の話者を考慮する必要

¹ Face threatening act. 相手のポジティブフェイス、ネガティブフェイスを脅かす言語行動。

² 中国語の「面子」や英語では「to lose face」のように暗喩的にイディオムになっている、人が社会的に認められたいと思う自分に対する価値 (Goffman 1967) で、B&L はそれをさらに二種類に分け、大人として他人から前向きに認められたい (賞賛されたい) ポジティブフェイス、大人として他人から干渉を受けたくないネガティブフェイスがあるとした。

³ コミュニケーション時の話し手の立ち位置 (Goffman 1974)。これにより Goffman は話者とそれ以外の者のコミュニケーション時の関係性を明示した。

⁴ ポライトネス 1 またはファースト・オーダー・ポライトネスと分類される (Watts 2003)。

⁵ ポライトネス 2 またはセカンド・オーダー・ポライトネスと分類され、言語による相互行為のみに現われるものに言及する (Watts 2003)。

性を提起し、Tannen (1984) もアメリカ人とギリシャ人の短い返答 (short answer) の含意の違いを実験結果より採り上げている。

Ide (2010) が主張するように、今日のように人や物の交流が進むグローバル化の時代には、相互理解のための語用論研究が必要となってくる。同様に、背景情報およびそれに基づくポライトネスが未知であっても背景の異なる相手とのコミュニケーションを成立させなければいけない状況下では、聞き手についても着目することに迫られ、社会・文化・国家・民族といったマクロな視点以外に、対個人といったミクロな視点での相互行為 (Mey 2001) についての研究が課題となる。

このように、聞き手の視点に立ったポライトネスが重要になってくることは研究者により意識されているが、聞き手の視点をコミュニケーション上の話し手とそれ以外の者の関係性を示すフットイングと関連させた先行研究は管見の限りない。本研究では、Goffman (1974) の概念を基に Tannen (1986) の提示した、フットイングとは話し手間の関係性を確認する (identifies) フレームのひとつであり、異なるフットイングによりコミュニケーションされることにより、同じ情報が全く異なった効果をもつという定義に従い、小話題毎の一人称代名詞を指標とするフットイング (Brown and Gilman 1960) およびナラティブ⁶上のフットイングを取り上げ、小話題毎のターン・テーク⁷、ネガティブな語・ポジティブな語⁸と比較することにより探究することにした。

3 研究目的と研究方法

本研究では、対人コミュニケーションが不成立になる要因を分析し、明確化するために、年齢・職業・所属コミュニティの異なる日本語話者二者間の初対面会話のコミュニケーションにおける相互行為を取り上げた。会話データ協力者は、初対面の日本語話者2名で、一人は地域日本語教室のボランティア講師 63 歳女性 P、もう一人は大学院生台湾国籍バイリンガル 25 歳女性 O で、第三者に会話を遮断されない大学の一室で IC レコーダーにて録音し収集した。相手に対する情報を研究者との知己ということ以外に何も与えず、ポライトネス2を会話実験前に見積もることのできない状況下においた。実験的負荷として、特別に O に会話途中で国籍を告白してもらうよう依頼した⁹。会話はすべて仔細に文字化データに置き換え、分析資料とした。また、会話中の小話題別にキーワードとなる語をピックアップして質問票を作成し、録音の約1ヵ月後のフォローアップ・インタビュー時に、聞き手にとりポジティブか否か、OとPより個別に聞き取りを行った。

⁶ 複数の出来事を時間軸上に並べて時間的順序を示す、複数の出来事の連鎖 (野口 2009)。

⁷ 発話の順番取り。発話交替ともいう。

⁸ 日本の社会的慣習である「(相手にとって良い) 言葉を選ぶ」ポライトネスが聞き手にフレームの変化を生起させる (中原 2009、Nakahara 2010) との予測に基づく。資料2参照。

⁹ これは研究上の関心から告白の後に顕著な沈黙がみられるかと期待したためであるが、実際には文法的な乱れが聞き手Pの直後の発話にみられたものの沈黙はみられなかった。

また、三牧（2010）の枠組みにより、会話全体を 12 の大話題と 32 の小話題¹⁰に分け、小話題毎に 1) ターン・テークイング、2) 質問票より得た聞き手にとってのネガティブ評価の語・ポジティブ評価の語、3) フットィングの一指標である話し手の一人称代名詞、4) 小話題中のナラティブに現れる話し手のフットィングとその継続時間を O、P 各々について比較分析した。

4 結果

4.1 ターン・テークイング

一般に発話の順番取りであるターン・テークイングの数が相互行為における相対的権力（POWER）の違いを表すとされるが、本会話データでは図 1 に見るように一部の小話題（15）¹¹を除いてほとんど差がない。

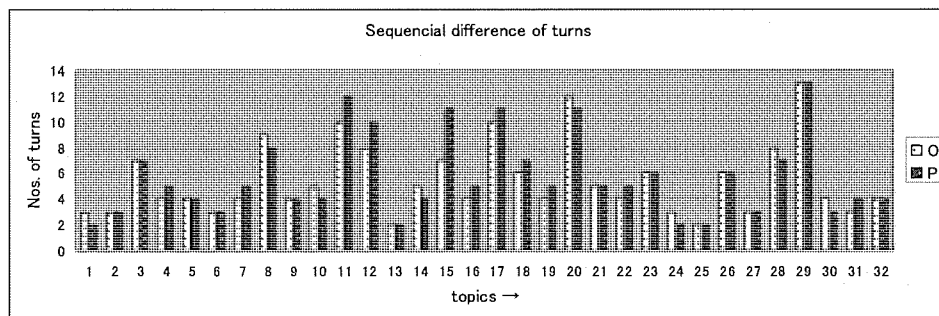


図 1 話題毎の発話数の違い

このグラフは、実験室的环境における会話では会話協力者のゴールが会話を与えられた時間継続し、そのために努力するという性質のものになっているため、発話の順番取りの差異が相対的権力関係を示しにくいことの現れではないかと考えられる。また、録音直後のインタビューでは O、P 両方が「共通の話題が出て、話題に困らなかった」と言及している。つまり共通の関心事である話題が容易に見つかった結果として発話の順番取りが対等に行われたことの証明にはなるが、ターン合計数の比較のみでは、その後の対人コミュニケーション不成立の原因は明示されない。

4.2 聞き手評価のネガティブな語・ポジティブな語

聞き手評価のネガティブな語とポジティブな語の出現様相を O・P 別に、図 2 に示した。

¹⁰ 主な内容については、資料 1 参照。

¹¹ 小話題 15 では中韓の学習者について主に P が自己の経験を話しているため、中国人・韓国人学習者に詳しくない O の発話が少なくなったものである。

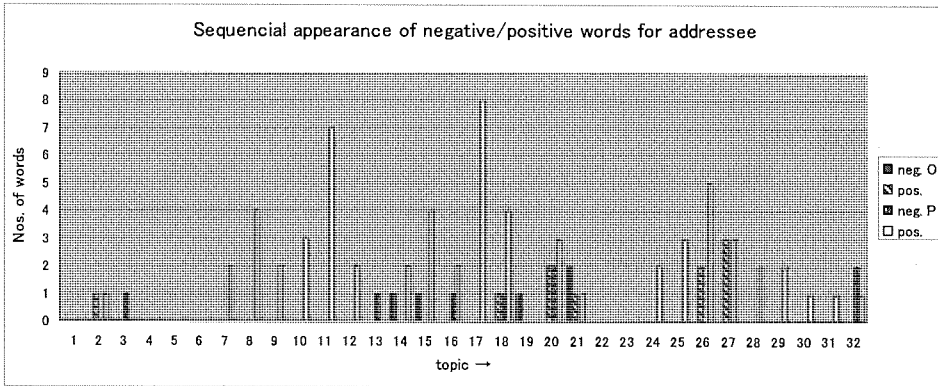


図2 話題毎のネガティブ/ポジティブ評価の語の出現

このグラフ全体の傾向をみると、Oに比べるとPにとりポジティブな語の出現が多くみられ、フォローアップ・インタビューのPの会話を楽しんだという感想を裏付ける。しかし、Oは会話をPほど高く評価しなかった。グラフでは、Oにとりネガティブな語の出現が会話進行の中間部に多くみられ、この部分の会話がOにとって評価が低くなる直接の原因を生んでいることが推察される。後半部にOにとりポジティブな語が出現するが、出現語数の推移のみでは明確化に限界がある。実態の複雑な様相は、下記の(1)、(2)の会話例が顕著に示している。

(1) のOにとってのポジティブ評価の語(=母)を含んだ発話の連鎖(310~314)を、(2)ではPがOにとってのネガティブ評価の語(=中国人)で置き換えながら(315)発話連鎖を行い(315~322)、話題を変えている。(文字化の規則は欄外参照¹²⁾)

(1) 【小話題 20】

- 306 O: うちの父は YMCA とか出た人なんです。
- 307 P: あー男性としてもね。
- 308 O: だからなんかある程度文法の基礎とかはわかってるんですけどー＝
- 309 P: あー うんうん
- 310 O: =母とかは会話でしか日本語を学んでなかったんでもう、その文法の意味があんまりわからなくて、＝
- 311 P: あー
- 312 O: =なんでここ、がーなんみたいなの、なんでここ、にーなんみたいなの。

¹² ー：長音，。：平板イントネーション，、：短いポーズ，？：上昇イントネーション，＝：文の切れ目のない継続，||：同時発話，{}：非言語行動，笑い，下線：筆者による注目

- 313 P: アハハハハハ うーん
 314 O: もう意味がわからん。

(2) 【小話題 21】

- 315 P: 助詞はむづかしいですね | 、中国人の人にとってはね | うーんうん
 316 O: | そうなんです | そうなんです
 317 O: | も全然わからないって言って、説明してもなんかうーん | うーんと
 318 P: | うんうん | ああでもえらいですね。
 319 P: でもま、自分で勉強できる？見たらなんか、読めなくても意味はわかるって=
 320 O: あ漢字を | こう拾い、拾って一 | ああそうですね。
 321 P: = | みんな言うんですよ、ははい |
 322 P: 韓国の人も中国の人もそうだから。
 323 O: はいはい

4.3 話し手の一人称の現れ方

フッティングの一指標である話し手の一人称の出現様相を、O・P 別に会話進行に沿って図3に示した。このグラフでは、Pによる一人称単数と一人称複数の使用があり（破線矢印）、Oによる国籍告白の後、少し時間をおいてPによる一人称複数から一人称単数へと言い換えが行われ（実線矢印）、それ以降Pが一人称複数のみを多用していることが示される。

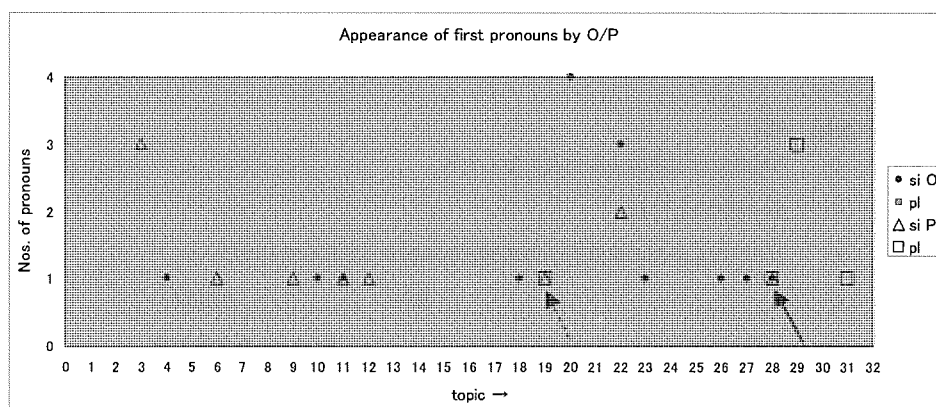


図3 話題毎の第一人称の出現

(3) の会話ではPが290で、「私たち」でP自身とOに言及している。図3の破線矢印にあたる箇所である。(4) の会話の293でOが国籍を告白するが、それを受けたPの295の発話に文法の乱れがみられる。

292 P: なんか韓国とか中国の人にとっては、すごくいいみたい。

295 P: ぜんぜん癖がないわかるよねとか日本でずっと育った？

(5) の 373 では、以下のような形で P が「私ら」から「私」に一人称を言い換えている。図 3 の実線矢印の箇所である。一人称複数形の「私ら」から一人称単数形の「私」に変わっている。

374 O: アツハ そー

373 の P の「私ら」は関西弁「私らかて」の形で使われ、P と関西弁話者（O も含む）を指し、言い換えられた「私」は P のみをそこから抽出し（extract）言及するものである。これは集団化（aggregate）と逆方向の言語行動となっている（Lerner and Kitzinger 2007）。

また、(6) にみられるように、この後 P の「私たち」は、P が過剰に自分と O をも含めた学習者のことを集団化して言及するという不自然な箇所 (388) を経て、聞き手 O を含まない P の所属集団を「私たち」で指すようになる (390)。なぜなら、「私たち」を用いて言及した自己に再び言及し直す「自分たちで」を用いた「自分たちで思う…」という文には、日本語では通常、聞き手を含めないし、文脈上からも明らかなためである。

379 O: もう無理です。そんな無理やし、もういいやん、もう一特徴やて思ったらいいいやん＝

- 380 P: ふーん ふーん ふーん
ふん
- 381 O: =てか、大阪に住んでたら | ーそういうイントネーション | にーなってしまう
うという。
- 382 P: | うーんうんうんうん | そうやねえ、う
んうんうんうん
- 383 O: しゃあないやん、言うたかてしゃあない | て言うたらあかん、自分もあかん
言うてるやん | みたいな。
- 384 P: ハハハハ | しゃあないやん(ハハハハハハ)
| あーわかんねー
- 385 O: | そうなんです | 、難しいです。でもやっぱ癖、なんか目立つみたいです。
- 386 P: | そうやねえ | うーん
- 387 O: | だから |
- 388 P: | そうですね | あの私らも最初、日本語一で | 、きっちりです・ますで習わ
ないと | 、=
- 389 O: | はい
- 390 P: | はい
=私たちあんなにねー、何々やーとかね何々なーとかね | 使ってるんか
な一て、自分たちで思うぐらい | 、=
- 391 O: | はい
| はー

P は、(6) の 390 での聞き手 O にとって不確かな使い方の一人称複数を経て、(7) の 421 では、完全に「私たち」から O を除外する。

(7) 【小話題 31】

- 421 P: そやから最初耳から聞いて覚えるのは大変やね、でも私たちの英語も、あま
り丁寧すぎてね、あの一学生同士で話、したりとかね | 、ていうのには=
- 422 O: | はい{神妙なトーン}
- 423 P: =ちよっとおかしいかも知れないよねーとゆってるんですけどね。
- 424 P: あれも普通の基本的なところから | 始まるからねーうーん | その辺のところ
はうーん |
- 425 O: | はいはいはい | あー | もうそんな
ないですもんね、| そんな

4.4 ナラティブに現れる話し手のフットティング

図 4 は、全 32 個の小話題において話し手がナラティブにより発話を独占した時間を、ナラティブ中の話し手のフットティング毎に示したものである。

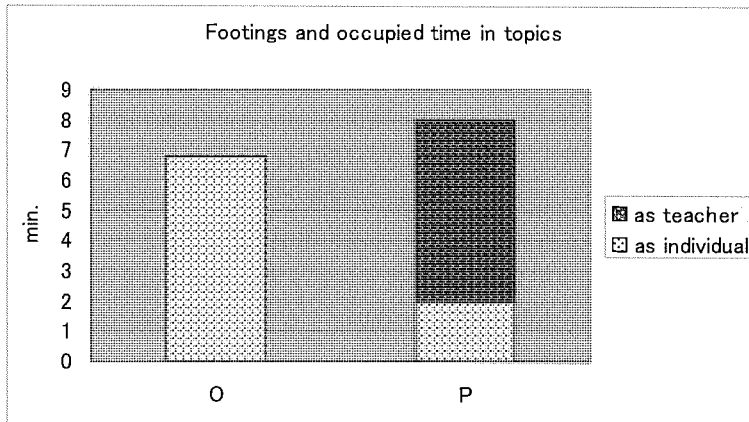


図4 話題中のフットィングと継続時間（分）

このグラフでは、O のナラティブによる発話独占時間は全て個人としてのフットィングが占め、P のナラティブによる発話独占時間では個人としてのフットィングが全体の 1/4（会話前半に集中）、教師としてのフットィングが 3/4 を占める。つまり、話題中 O は個人としてのフットィングを維持したが、P はほぼ教師としてのフットィングを維持したという差異が顕著である。

前述の (5) の 377～387 の発話連鎖では、この様相が典型的に現われている。O は個人として O と O の家族（母）を中心に中国人の母と O 自身の関係について自己開示した発話を展開しているが、それを受けた P は 388 以降の発話で、耳から勉強した人と大阪弁（関西方言）話者の関係へと話題の中心人物を一般的な名詞に置き換える。O の発話が個人としてのフットィングで行われているのに対し、P の発話が教師としてのフットィングを維持するために行われているのは明らかである。

5 まとめ

一般的に「相手にとって失礼のない言葉（語）を選ぶようにする」「相手に対して敬語や、です・ます（丁寧体）を使う」ということが、日本では社会通念として、「敬意表現」という社会規範的ポライトネスになっている。しかし本稿でみてきたように、発話が複数回にわたる談話レベルの相互行為を会話進行に沿って詳細に分析すると、複雑な様相が示される。

前述のように、O にとってのポジティブ評価の語（＝母）を含んだ発話の連鎖を、P が O にとってのネガティブ評価の語（＝中国人）で置き換えて発話連鎖を行い、P の一人称代名詞の複数から単数への言い換えが、意識的にせよ無意識的にせよ、話し手を含む集団（＝一人称複数代名詞）から聞き手 O を除外するために行われている。また、会話の最初から最後まで O は個人としてのフットィングでコミュニケーションを行い、P は自己紹

介、自己開示にあたる前半部の話題以外では、教師としてのフットイングを維持しながら、コミュニケーションを行っている。

今回のケースでは、話し手が自己に言及する際に、話し手を抽出 (extract) して聞き手を除外する形で言い換えた一人称代名詞の使用が、話し手の所属集団から聞き手を疎外する結果となった。一方、話し手が聞き手に受け取られたい¹³フットイングを維持するために、無意識にせよ、聞き手の個人的な話題や近親者についての話題に対し一般名詞かつ聞き手がネガティブ評価する語に置き換えて発話の連鎖を行い、聞き手の話題中のフットイングを意識して自己のフットイングを調整するフットイング変化をほとんど全く行わなかった。相互行為に埋め込まれたこれらの要因が、本ケースの現場における対人コミュニケーションの壁になったと考えられる。

これはフォローアップ・インタビューでの O、P の感想を裏付けている。直後のインタビューで 1) 敬語をあまり使わなかったことを気にし、2) 相手主導の話題に合わせるように努めた、と話していた O が、約 1 ヶ月後に実施したフォローアップ・インタビューでは、「実験に協力する以外にもう話したくない。相手は建前ばかり」と感想内容を変化させ、同じく直後のインタビューで、1) 模範になるような会話になっているかどうかを気にし、2) 話題が弾んで楽しかった、と話していた P が、約 1 ヶ月後には「機会があればいつでも話したいが、相手が中国人と知らされていたら、もっとうまく扱えたのに」とフォローアップ・インタビューで明かした。つまり、この会話に対する評価が O、P 両者でまったく異なることが示された。

したがって対人コミュニケーションの現場では、相互行為参加者のフットイングの意識化および話し手だけでなく聞き手をも意識して調整するフットイング変化が、聞き手の視点を考慮したポライトネスにつながり、対人コミュニケーションの成功に顕著な役割を果たすことが示唆された。

今後の課題として、ケースを変えて会話データを複数例収集し、話し手が聞き手を意識してフットイングを調整しフットイング変化を行った時に使用した言語表現を抽出し、フットイングの言語学的側面をより明確化したい。さらに、本研究が、聞き手の視点を配慮した言語学的ポライトネスをはじめとする語用論的研究や他者理解についての社会言語学研究に貢献できるようにして行きたい。

資料 1

大話題	小話題
1 自己紹介	1 自己紹介 (社会規範)
	2 相手の名前

¹³ P は実際には、ボランティアであって教師ではないので、O にそう受け取られたいフットイングを選んでいていると考えられる。

2	自己紹介(自己開示)	3	相手の名前からの連想
		4	共通の知人
		5	会話協力の経緯
		6	共通の知人
3	日本語教室	7	ボランティア
		8	学習者
4	大学	9	ボランティア
		10	学生サポーター
		11	外国人サポーター制度
5	日本語教室	12	日本語の教え方
		13	ボランティア
		14	学習者
		15	中韓の学習者
		16	ボランティア
6	大学	17	留学生
		18	外国人大学院生
7	漢字習得	19	外国人学習者(欧米と中韓)
8	日本語学習	20	〇と〇の家族
		21	中国人学習者
		22	1級読解
9	日本語使用	23	バイリンガル
		24	海外の人
10	話し言葉	25	〇の母
		26	〇の母の職業
11	関西方言	27	〇の母
		28	〇と〇の母
		29	学習者
12	話し言葉	30	学習者
		31	英語
13	日本語学習	32	学習者

資料 2

ポジティブ評価の語

- O : 武豊、謙遜する、お母さん（母）、大学、関西弁
 P : 武豊、交流する、留学生、外大、勉強、中国人（中国の人）、韓国人（韓国の人）、情報網、大阪市、アメリカ人、違和感、日本語 1 級、お母さん（母）、センシティブ、話し言葉、大学、関西弁、標準語、英語、クセ

ネガティブ評価の語

- O : 中国人（中国の人）
 P : 競馬、無料、謙遜する、文法、友達同士、タメロ

参考文献

- Brown, R. and Gilman, A., “The Pronouns of Power and Solidarity,” *Style in Language*, ed. by T. Sebeok, MIT Press, 1960, pp. 253-276.
- Brown, P. and Levinson, S.C., *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- Goffman, E., *Interaction Ritual: Essays on Face-to-face Behavior*, NY: Anchor Books, 1967.
- Goffman, E., *Frame Analysis*, NY: Harper and Row, 1974.
- Gumperz, J.J., *Discourse Strategies*, Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- Ide, S. “Formal Forms and Discernment: Two Neglected Aspects of Linguistic Politeness,” *Multilingua* 8-2/3, 1989, pp. 223-248.
- Ide, S., Opening Address for the 11th International Pragmatics Association, 2009, uploaded on Ide’s blog <<http://www.sachikoide.com/index.html>> (2010/4/19 accessed).
- Leech, G., *Principles of Pragmatics*, London: Longman, 1983.
- Lerner, G. H. and Kitzinger, C., “Extraction and Aggregation in the Repair of Individual and Collective Self-reference,” *Discourse Studies*, Sage Publications, 2007, pp. 526-557.
- Mey, J. L., *Pragmatics: An Introduction Second Edition*, Oxford: Blackwell, 2001.
- Nakahara, K., *Footings as a Factor of Communication-Breakdown: A Case Study of Interactions between Two Japanese Speakers*, MA thesis submitted to Graduate School of Letters, Osaka University, 2010.
- Tannen, D., *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends*, NJ: Norwood, 1984.
- Tannen, D., *That’s Not What I Meant!: How Conversational Style Makes or Breaks Relationships*, NY: Ballantine Books, 1986.
- Watts, R. J., *Politeness*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- 井出祥子「現代の敬語理論 ―日本と欧米の包括へ」『言語』16(8)大修館書店、1987、pp. 26-31。

井出祥子『わきまえの語用論』大修館書店、2006。

井出祥子、ディスカッサントとしての発言、「第 23 回社会言語科学会研究大会 10 周年記念シンポジウム 1、配慮言語行動研究の新地平ー歴史的・社会的・コミュニケーション的なアプローチの連携から見えるものー」、2009。

三牧陽子「会話参加者による FTA バランス探求行動」『社会言語科学』社会言語科学会、2008、pp.222-225。

三牧陽子『初対面コミュニケーションにおける話題管理スキーマに関する日米中韓対照研究』平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号 19520458、研究成果報告書、2010。

中原京子「相互行為参与者間の communication-breakdownーそのメカニズムについての一考察ー」『第 23 回社会言語科学会研究大会発表論文』社会言語科学会、2009、pp. 222-225。

野口裕二「序章 ナラティヴ・アプローチの展開」野口裕二（編）『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、2009。